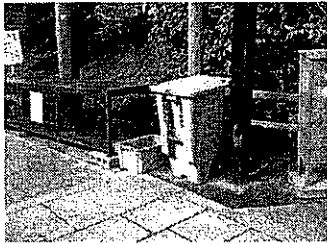


行ってきました甲賀市生ごみリサイクル

1. 予定通り開催

10月27日、天候に恵まれ、予定通り第1回ごみリサイクル学習会 in 近畿「甲賀市生ごみリサイクルシステム見学会」は実施されました。

大阪から草津經由貴生川へ、貴生川からは1両編成の近江鉄道にゆられて、水口城南駅へ。水口城のすぐ前の駅です。そこでさっそくお堀端にごみステーション発見、グレーのプラスチック製生ごみ回収容器と埋め立てごみを入れるコンテナなどが並んでいます。(写真)



集合場所の市役所からは、すぐに市役所の車で工場団地にある処理委託業者の水口テクノスへ移動。ここで説明を受けたのち、工場見学。

甲賀市は平成16年1月に合併して誕生した新しい町で人口およそ9万5千人、3万世帯ですが、そのうち、5000世帯が生ごみリサイクルに参加しているそうです。最初は水口町ではじまったシステムですが、今は全市から参加しています。

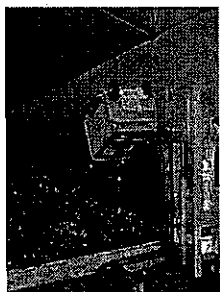
生ごみリサイクルシステムに参加するのは各戸ごとではなく、集積所(ごみステーション)単位であり、ごみステーションは10から50軒にひとつ設置されています。参加するにはこの単位で意見がまとまり、説明会を受ける必要があります。

2. 回収の流れ

●まず各家庭ではバケツほどの大きさの生ゴミ分別容器を購入します。ひとつ1380円で、4分の一補助があるそうです。ここに生ごみと市役所から配布された種堆肥を交互に重ねてサンドイッチにします。この方法により水分が吸収され、においがおさえられるそうです。種堆肥は参加名簿に基づいて各戸と週あたりひとつふくろ(8ℓ、およそ3.2kg)配布されます。

●分別容器の中身はごみステーションにある生ごみ専用回収容器に投入し、回収容器は週に2回業者が回収します。

●回収された生ごみはリサイクルセンターにつくと、まず1次発酵処理施設で約2週間発酵促進されます(写真)。ここでは公園・街路の刈草、剪定枝が混合されて水分が調整されたり、液肥を散布して水分調整や脱臭が行われます。また、スクープ式攪拌装置で攪拌しながら堆肥を順次移動させます。



●ついで2次発酵処理施設(写真上)で自然発酵が進められます。ここは6の区画にわかれていて、1週間ごとに次の区画に移動し6週間後堆肥が完成します。この堆肥にもやはりスプーン類やビニール袋などが混ざっていますが、最後にはふるいにかけて、種堆肥となって袋詰めされ各家庭に配布されます。塩分濃度は0.7%、発芽障害が起こるとされる5%より低く問題はないとのこと。

全工程、思ったほどにおいがせず、水処理プラントや大型のベルトコンベアーぐらいしか機械らしいものがなく、シンプルな印象でした。

3. 生ごみリサイクルをはじめるまで

甲賀市の前身のひとつ水口町は、工業団地の立地などで人口がふえ、また大型店の進出などもあり、ごみの量が増加し、郡内で運営する焼却施設の限界が問題になってきました。一方平成12年には県下ではじめてISO14001を取得するなど環境にも熱心でした。

今後のごみの扱いを検討し、燃やしたほうが確かにランニングコストは安いですが設備の維持のためにごみを集め続けられないといけないことや、炉の建設コスト、また炭素量の比較(燃やした場合の3分の1の量になる。)、ダイオキシン発生問題など総合的検討を行い、結局長続きする方法を選び、環境のためにはお金をかけるべきところではかけようということになりました。

また、全市の60%の生ごみが回収できれば、可燃ごみの回収を週1に減らせるので、コストも下がってくるとのこと。

4. エコライフ協議会

生ごみリサイクルシステムを広げてゆくには住民との協力が不可欠であり、そのための諮問機関として平成13年10月に「水口町エコライフ推進協議会」が設立されました。推進にあたって約4ヶ月間モニター試行が行われ、560戸の参加によるモデル試行が行われました。そして、この期間のアンケートを踏まえ10月から全町展開(水口町)に移行し、参加者を募るための説明会が開始されました。

5. 展開にあたり重要なこと

甲賀市担当者が生ごみ堆肥化を進める上で以下のことを導入の課題と考えたとのことです。

- ① 家庭での分別は簡単で手間のかからないこと
- ② 悪臭を極力抑えること
- ③ 将来的に有機堆肥として利用できるものであること
- ④ 堆肥がすべて利用できること
- ⑤ 堆肥化に際し、エネルギー消費を極力抑制すること
- ⑥ コストを極力少なくすること

また、他市町村ではじめてやる場合、いきなり大きな予算をとるのではなく、モデルからはじめて少しずつ固めてゆくこと、行政の真剣さを見せておくこと、特に首長の一声が大事とのことでした。

見たところ家庭での生ごみ分別はそれほど難しくなくやれそうだなという印象でした。問題はコミュニティ単位で合意するプロセスとその先の処理施設です。

